イルス対策に苦労をしています。ちょうどこの原稿を書いている際にワクチン接種がスタートするのですが、昨年度および今年度前期に関しては、共通教育科目では実習など一部の講義を除いてオンライン、学部科目でもオンライン中心に部分的に対面講義で対応しています。そのため私も含め、ほとんどの教員がオンライン用の講義資料・教材作成に追われることとなりました。しかし前向きに捉えると、オンライン用の講義資料・教材は、今回のような事態がなければ作成することはなかったものです。これらの教材は今後対面講義となっても活用可能であり、学生からのリアクションも含めて大学の講義システムを考える良い機会となりました。例えば、作成した講義資料・教材は今後も予習・復習用に利用可能ですし、欠席した学生の補講に活用することもできます。この経験をいかして、より良い講義・学生実験を組み立てていこうと考えています。

研究については、分子研経験者らしく？水谷泰久先生、水野操先生と共に光を利用したタンパク質の物理化学研究に取り組んでいます。大阪大学に着任してからも学生時代からの研究対象であるヘムタンパク質を中心に研究を進めてきましたが、研究への取り組み方や技術・知識の何割かは分子研での経験や共同研究によって培われたものです。ここ数年は新しい方向性を目指して試行錯誤を繰り返しています。コロナウイルスの感染状況が落ち着いたら、また分子研での学会・研究会で発表できることを楽しみにしております。

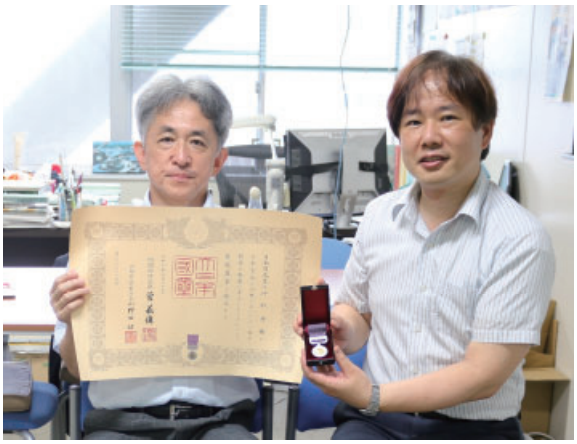
分子研出身者の今■受賞報告

神取秀樹教授の紫綬褒章受章を祝して

名古屋工業大学の神取秀樹教授が令和3年4月29日に紫綬褒章という誠に栄誉ある章を授与されました。新型コロナウイルス感染症による影響のため、褒章と賞状は7月1日に大学にて学長から伝達されましたが、研究室のメンバーからもお祝いの気持ちが伝えられました。とても格調高い紫綬褒章のメダルを、学生達が緊張しつつも手に取って触らせてもらえたことは特別な体験になったことと思います。神取先生は、受章に至ったのは、これまでの学生が研究に熱心に取り組んでくれたおかげであると述べておられました。後輩の学生もさらに研究を発展させる決意を持ってくれたのではないかと期待するところです。

受章についての業績の概要は、「生物物理学分野において、視覚に関わる光応答タンパク質の研究により、視覚の初期過程や霊長類の赤・緑・青視物質の構造を分光学的に解明するとともに、光応答タンパク質である微生物のロドプシンに関する機能を発見・転換・創成するなど優れた業績を挙げ、関連分野の発展に多大な貢献をした。」というものです。神取先生は大学院生の頃から現在まで一貫してロドプシンの生物物理学および分子科学的な観点での研究を継続されてきました。視覚の初期過程を異性化反応と特定するに至ったピコ秒レーザー分光、タンパク質内部の水分子の水素結合変化を解析する赤外分光法などを主な手法とし、生体分子の分子科学分野で先端的な研究を展開されてきました。また、近年ではオプトバイオテクノロジー研究センター長として、国内および国際的な共同研究を牽引するなどして、新奇ロドプシ

授与された紫綬褒章



神取秀樹教授（左）と執筆者（右）

ン類の発見や構造・機能解析などで顕著な業績を築かれてきました。

神取先生と分子研との関わりとしては、豊田理化学研究所奨励研究員およびIMSフェローとして吉原經太郎教授の研究室に平成2年4月～平成4年10月まで在籍されていたことや、平成24～27年度の運営会議委員（副議長）を務められたことなどがあります。分子研レターズ64号のレターズ「分子研は生命科学にどう取り組むべきか？」に吉原研在籍時の分子研との関わりについてもご執筆されていますのでご覧になってください。

ちなみに本記事の執筆者の古谷は、神取先生から京都大学にて大学院生の頃に直接の指導を受け、名古屋工業大学での神取研究室の立ち上げから平成21年2月まで学振PD、助手、助教として研究のいろはを教えていただきました。平成21年3月からは分子研にて准教授として独立した研究室を運営し、平成30年10月には、現在の名古屋工業大学に移っています。神取研究室と良い関係を築きつつも、古谷研究室として新たな展開を目指しているところです。

（古谷 祐詞（名古屋工業大学 准教授）　記）

研究所トピックス

生協による食品無人販売

共同利用で来所されるUVSORや機器センターのユーザーには、泊りがけで実験される方が多いため、所内の食事情の改善を求める声が長年にわたり所員に寄せられておりました。附属施設3棟改修工事の目玉の一つとして、分散していた各施設の控室を統合し、共同利用者控室（共同研究C棟205号室）が整備されることを契機に、この問題を解決できないか検討を進めて参りました。

その結果、2021年1月より共同利用者控室内で、スナックやカップ麺など軽食の無人販売を生協さんに行って頂けることになりました（写真参照）。営業が始まって数か月が経過しましたが、事業を継続するだけの売り上げを維持できており、やはり施設利用者からのニーズが大きかったのだということを改めて実感しているところです。

本件実現までには、多くの方に力添えを賜りました。特に生協の岩田千聖店長（当時）には店舗設置にご尽力いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

（林 憲志・湯澤 勇人　記）

この無人販売所（共同研究C棟205号室）は、どなたでも利用可能です。共同利用者、研究所スタッフを問わず、お気軽にご利用いただけましたら幸いです。